

[論文]

明治・大正期の漫画絵葉書にみる夫婦のかたち

早川 洋行

名古屋学院大学現代社会学部

要 旨

本論文は、明治・大正期の漫画絵葉書に描かれた夫婦像を題材にして、当時の夫婦の姿を考察するとともに、絵葉書というメディアが持っている特徴について論じたものである。第1章では修身教科書と双六から推察される明治・大正期の夫婦像を説明する。第2章では、漫画絵葉書に描かれた夫婦像が、それらとは正反対のものであることを指摘する。第3章では、こうした「女房天下」絵葉書についての従来の理解を批判して、こうした絵葉書が、より古い明治時代から存在していたことを示す。第4章では、絵葉書のメディア特性を明らかにするとともに、明治・大正期における実際の夫婦像について論じるとともに、本研究が提起した問題をまとめる。

キーワード：ジェンダー，明治大正，絵葉書，女房天下

The shape of a couple in Manga postcards of the Meiji and Taisho eras

Hiroyuki HAYAKAWA

Faculty of Contemporary Social Studies
Nagoya Gakuin University

目次

1. 修身教科書と双六
2. 「女房天下」の絵葉書
3. 「女房天下」の起源
4. 絵葉書と明治・大正期の夫婦

1. 修身教科書と双六

筆者は以前「戦後期双六にみる日本人のエートス」という論文を書いた¹⁾。その過程で、論文の対象とした「戦後期」のみならず「戦前」の双六をいくつか知ることになった。それは筆者がイメージしてきた明治大正期の社会像とほぼ合致するものであった。それを夫婦の姿に焦点にしぼって簡潔に述べれば、権力を持った夫と威厳のある父親（強夫威父）、良く気がつく妻と賢い母（良妻賢母）、そして家父長制にもとづくイエの世界である。本研究は、あるとき、それとはまったく異なる夫婦像を描いている飯澤天羊の「御細君閣下シリーズ」絵葉書に出会ったことをきっかけにしている。では「御細君閣下シリーズ」絵葉書は、どのような夫婦像を描いていたのか、それを述べる前にまず修身教科書と双六に描かれた、当時の夫婦像を確認しておくことにする。

明治・大正期の公教育は、セックスとジェンダーを区別しなかった。すなわち、男性と女性という性別は生まれながらにしての区別であり、それぞれの性には、それに応じた必然的に別の社会的役割があると考えた。文部省が作った国定教科書『尋常小学校修身書：巻六児童用』の「第21課男子の務と女子の務」は次のように教える。

男子も女子も人として国民として行うべき道に違いはありません。男子が世の繁栄をはからねばならぬと同じ様に、女子もそれをはからねばなりません。また女子が身もちを慎まねばならぬと同じ様に男子もそれを慎まねばなりません。

かように、人として国民としては違いはありませんが、男子と女子とによって、それぞれ実際の務はおのづから別れて居ります。

男子と女子とは生まれながらにして身体も違い性質も違ってきます。それで見ても、その務がおのづから違うことは明らかであります。強いことは男子のもちまえで、やさしいことは女子のもちまえです。国・社会・家を安全に保護していくようなことは男子の務で、家庭に和樂を与え、また子供を養育するようなことは女子の務であります。

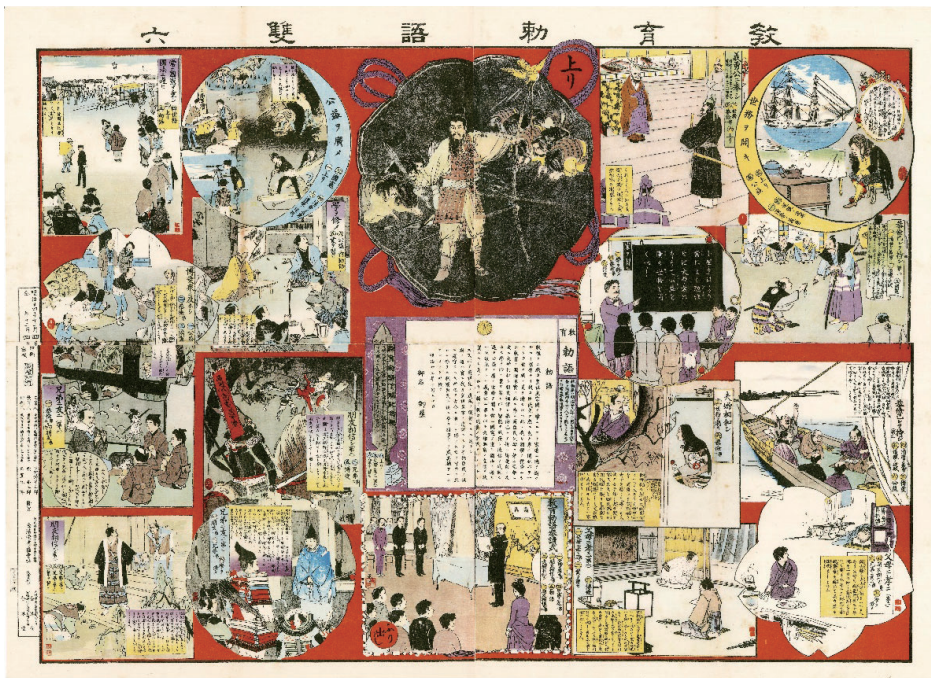
我等の父母が家庭で実際に行っている事は、すなわちこの男子の務と女子の務との主なものであります。父は一家の長として家族を率い、家計を支え、また外へ出ているいろいろな仕事をしています。母は主婦として内において父を助け、家をととのえ、我等の世話をしています。

男子と女子がよく調和して各その務を全うしていけば、家も栄え国も栄えます²⁾。

このように、教科書は一家の長を務めるのは男性の役割であり、女性はそれを助けるものであるとした。端的に言ってしまえば男尊女卑である。そして、この教えは、家庭と国家を連続する「イエ」

として考えていることにも注意したい。家庭内のこうした男女の性別分業は家庭内に止まるものではなくて、社会全体の普遍原理とされ、それゆえ家庭外にあっても女性の役割は男性の補助に限定されたのである。

明治政府は、明治天皇の名前で1890年（明治23年）に教育勅語を発表し、それは第2次世界大戦前日本の道徳教育の根幹となった。この教育勅語を国民全体に普及させるために導入されたのが、その翌年に出された「教育勅語雙六」である。教育勅語では、夫婦についてただ一言「夫婦相和シ」と書かれているだけである。これに対して教育勅語双六は、それを長門藩士、瀧鶴臺の妻にまつわる説話で説明する。その説話（「瀧鶴臺の妻の心掛け」）は次のようなものである。



〔「教育勅語雙六」明治24年〕

瀧鶴臺の妻は、長門の藩士某の女なり。才能人に勝れたれども、容貌醜くかりければ、年長くるまで娶るものなかりき。然れども、常に人に語りて、願わくは、瀧鶴臺先生の如き、賢人を得て、夫とせん、其の他凡庸の人は、我より嫁するを望まずといえり。

時に、鶴臺学問徳行の誉れ高かりければ、此の女の言を聞くもの、皆狂気なりとして、笑わざるものなかりき。然るに、鶴臺之を聞きて曰わく、此我を知るものなり、必善く内を治めん。顔面の醜美は、素より問うところに非ずと、遂に迎えて妻とせり。

此の女、鶴臺の妻となり、夫に事えること、従順にして、その見識また高く、よく其の身を慎めり。或る日、鶴臺の食事に侍りて、給仕するとき、其の袖の中より、まろめたる赤き糸を落せり。鶴臺怪しみて、其の故を問う。妻恥を含み、答えて曰わく、妾愚にして、平素事を行うに、過ち多し、因りて其の過ち寡からんことを思い、曾て、赤白二様の糸丸を造り、常に之を袖の中に入れ置けり、若殊に逢いて、悪念の起ることあれば、赤き糸の丸を結び、善念の起るときは、白き糸を結びたるに、一二年にして、赤き玉は盛大となり、白き玉は、小にして、初めと異なることなかりしゆえ、益身をつつしみて、悪念を抑制しければ、白き丸次第に大きくなりて、今は赤白とも、殆ど均しきほどに至りたり。是偏に君の善行に、感化せられしが故なりとて、また白き糸の丸を出して、示したれば、鶴臺大いに感心し、其の愛でたき心と賞したりとぞ³⁾。

現代の感覚からすれば、容貌が醜くても赤い糸と白い糸を持って日々自分の身を慎んで暮らせば、偉い人の妻になって夫から誉めてもらえると言うのだから、まったくひどい話である。この時代において、女性にとっての幸せはこのようなものだった。

こうした考えは、双六にも反映している。幕末・維新期の文学作品を研究した前田愛は、加藤秀俊との対談において、出世双六について次のように述べている。「女性のほうは、玉の輿という上がりになります。実はその双六を実際にやってみましたが、玉の輿ルートは非常にむずかしくつくられていて、上がるのはほとんど絶望的。(笑) 女子学習院にはいて、政府の高官あるいは華族と結婚するという道順ですけれど...」⁴⁾。筆者は、結婚を至上のものとする女子向けの出世双六が、第二次世界大戦の敗戦を経て戦後期まで継続して作られたことについて前掲論文で指摘している。

この話に関連して「出世双六」について少し付言しておこう。出世双六には、人生の発達段階をたどるものとよりよい人物像をたどっていくタイプがあるが、敗戦によって社会の価値観が大きく変わったためであろう、いずれの出世双六も、戦後にはほとんど作られなくなった。ここでは、明治・大正期に作られた後者のタイプの双六を3枚紹介する。

「英雄・女傑・美人・侠客 一世一代天晴双六」(明治44年)に登場するのは、花川戸助六、八百屋お七、八幡太郎義家、清水次郎長、岩見重太郎、傾城高尾、北條時宗、国定忠治、宮本武蔵、幡随院長兵衛、荒木又右エ門、塚原卜伝、春日局、乳人政岡、巴御前、豊臣秀吉、静御前、西郷隆盛である。

「日本名婦双六」(大正2年)は、天宇受賣命、板額、松下禅尼、静御前、木村重成妻、秋色女、常盤御前、加賀千代、清少納言、平政子、小野小町、辨内侍、中将姫、袈裟御前、小督、瓜生保母、巴御前、紫式部、政岡、山内一豊妻、楠正行母、春日局、乃木夫人である。

「偉人英雄幼年時代双六」(大正7年)は、曾我の兄弟、日本武尊、武田勝千代、牛若丸、阿若丸、菅公、楠正成、松平竹千代、源為朝、加藤虎之助、一休、楠正行、真田幸村、日吉丸である。



「英雄・女傑・美人・侠客 一世一代天晴双六」明治44年)



「日本名婦双六」大正2年)



（「偉人英雄幼年時代双六」大正7年）

これらを見ると、そこに登場する人物のほとんどが、武士階級の価値観である武闘的に強い男性、そうした男性を支えた女性、そして武士の一族、任侠の一家、天皇制国家等々のパリエーションの違いはあるものの、何らかの「イエ」の名誉と隆盛に貢献したとされる人物であることがわかるだろう。このように、当時の双六は支配階級であった武士の価値観、すなわち日本政府が定めた修身教科書を踏襲する価値観で作られていた。

つまり、明治・大正期における修身教科書と双六は、総じて、男尊女卑のジェンダー秩序と家父長制にもとづくイエの世界を描いていたのである。

2. 「女房天下」の絵葉書

さて、次に筆者に衝撃を与えたと述べた飯澤天羊「御細君閣下シリーズ」絵葉書を紹介する。飯澤天羊については、本名を飯澤傳之丞と言い、1948年に没したことが国立国会図書館のデータベースから、また、山形県の生まれであることが『風刺漫画』（1913年、原題は『罵倒漫画』1910年）に載っている小杉天外の序文からわかる程度の情報しかない。彼は、大正期から昭和の初期にかけて、双六、本の挿絵、滑稽漫画本、そして絵葉書の作者として活躍した画家である。絵葉書の中には、「御細君閣下シリーズ」のみならず、女優の肖像画や仲睦まじい男女（夫婦）の姿を描いたものもある。

明治・大正期の漫画絵葉書にみる夫婦のかたち



(飯澤天羊の「御細君閣下シリーズ絵葉書」以外の作品)

しかし、何といても彼の名を世に知らしめたのは、次にあげる「御細君閣下シリーズ」だろう。



(飯澤天羊「御細君閣下シリーズ」絵葉書1)

これらの絵葉書をどう理解したらいいのだろうか。筆者は、これらの絵葉書に最初に直面したときに、正直に言って戸惑いを禁じ得なかった。なぜなら、私がそれまで知っていた明治・大正期は、先に述べたような男尊女卑の世界であった。しかし、飯澤の絵葉書は、それとは正反対の夫婦関係を描いている。夫が妻にへりくだって、かしずいているのである。

こんなことが当時、本当にあったりだろうか。はじめのうち、筆者は、これは、完全なフィクションであって、当時の人は、そうした絵葉書を、ただたんに夢のような、実際にはありえない「滑稽」な図柄として、楽しんでいたに過ぎないのかもしれない、とも思った。そうした中で、やがて出会ったのが、日本の近代漫画の研究者としてよく知られた清水勲の、「女房天下」絵葉書に対する次の言葉であった。

4年3カ月にわたる第一次世界大戦が大正7年11月に終わるが、まもなく大戦景気も終わりを告げ、大正9年から戦後恐慌が始まった。不景気は世の亭主たちのこずかいを直撃。会社帰りにチョット一杯ができなくなって家に直行。給料も上がらないことで家では女房に頭が上がらなくなる。こうして女房天下の風潮が生まれ、それが漫画絵葉書にたくさん描かれるようになった。とくに石野馬城や飯沢天羊がその人気作家であった⁵⁾。

筆者はこの言明に疑問を持った。そして、この問題をより深く考えるようになったのである。それはどういうことか。

この言明は、二つのことを主張している。第一に、現実社会のありさまが漫画絵葉書に反映しているということであり、第二に、こうした「女房天下」の風潮は大正9(1920)年以降に生まれたもの

だということである。第一の点は、根拠が示されていないので、ここからだけでは何とも言えないが、第二の点は、明らかにおかしい。以下、その理由を述べる。

日本では明治33(1900)年、逓信省令第42号によって私製葉書が認可されるのだが、それから明治40(1907)年までは、宛名面に私信を書くことは許されなかった。その後、大正7(1918)まで三分の一のスペースに許され、それ以降は二分の一までに拡大された。また昭和8(1933)年からは「きかは便郵」という文字が「きかは便郵」に変わる。つまり、宛名面をみれば①明治33(1900)～明治40(1907)年に作られたもの、②明治40(1907)～大正7(1918)年に作られたもの、③大正7(1918)～昭和8(1933)年に作られたもの、のいずれかであるかが、判別できるのである⁶⁾。

先に示した4枚の絵葉書の宛名面は、「きかは便郵」とされ、二分の一のところ線が引かれている。したがって、③大正7(1918)～昭和8(1933)年の時期のものであることがわかる。これら4枚は、たしかに清水の言うとおりに、大正9(1920)年以降のものかもしれない。

しかし、飯澤の「御細君閣下シリーズ」は、それ以前から存在していた。次の絵葉書をご覧いただきたい。



(飯澤天羊「御細君閣下シリーズ」絵葉書2)

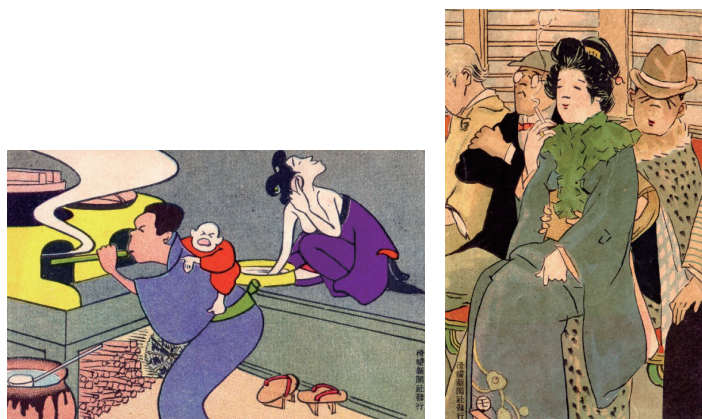
これら8枚の絵葉書は、宛名面の下から三分の一のところに線が引かれているから、②明治40(1907)～大正7(1918)年に作られたものと推察できる。「天羊」の落款こそないものの文面と画風からして飯澤天羊の作品に間違いない。

清水があげたもう一人の作者、石野馬城の絵葉書も同様である。次に示す彼の8枚の絵葉書も、宛名面の様式からして②明治40(1907)～大正7(1918)年に、作られたものとみなし得る。



(石野馬城「女房天下」絵葉書)

さらにあげれば、当時人気を博した宮武外骨が作った「滑稽新聞」の絵葉書にも下記のようなものがある。これらも宛名面の様式から②明治40(1907)～大正7(1918)年に作られたものと判定できる。



(「滑稽新聞」絵葉書)

このように、大正7(1918)年以前に作られた「女房天下」絵葉書が、多種多様に多数存在していることを考えると、「女房天下」の風潮は大正9(1920)年以降に生まれたものだという清水の主張は、筆者には、とても信じがたいのである。

3. 「女房天下」の起源

「女房天下」絵葉書には、多種多様な図柄があるが、その中でも、「妻に従って、荷物を持ち後ろから歩く夫」を描く構図は、とくに頻繁にみられるものである。この図柄の絵葉書をいくつか紹介することにしよう。



(「妻に従う夫」絵葉書)

作者不詳の上の絵葉書のうち、上段の3枚は③大正7（1918）～昭和8（1933）年のもの、中段右端を除く3枚は、②明治40（1907）～大正7（1918）年のものであり、中段左端の絵葉書によく似た中段右端の1枚は、宛名面にケイ線が引かれておらず、①明治33（1900）～明治40（1907）年のものかもしれない。作者がはっきりしているものもある。日本における近代漫画の祖として知られる北澤楽天は、傘を持って妻に従う夫を描いている。これも、①明治33（1900）～明治40（1907）年のものである。



〔「時事新報漫画絵葉書」1〕

ところで、何故、この図柄がこんなにも流行したのだろうか。大正11（1922）年に出版された関伊右衛門『西洋文化の悲哀』（登美屋書店）は、生命保険業を営む作者が保険研究のためにヨーロッパとアメリカを視察した際の経験を書いた本だが、そこには次のような記述がある。

西洋では、往来の足音は、凡べて女の憂々（かつかつ）と高く敷石に響かず、踵の音である。女は威風堂々とあるく、男は鞠躬如（きくきうじょ…体を丸めるの意）として、女のあとからついてゆく、フレンドであれば、女は男を杖にしてあるく。

夫婦連れが赤ん坊を抱いて通る。男は赤ん坊を抱いて、買物の袋を持ち、その上に、女の傘まで腕にぶら下げて行くのに、女は素手うち振って、先に立ってゆく。男が荷物澤山で人通りを抜け兼ねて、グズグズすると、女は振り返って叱責する。女ならではの夜が明けぬ国は、日本が本家ではなくて、西洋が本家である⁷⁾。

これは、まさに漫画絵葉書の図柄である。そうだとすると、こうした光景は日本においても完全な空想ではなくて、実際にあったものだったのではないだろうか。文明開化を経験した日本人は、西洋の風俗を積極的にまねしようとした。そういう夫婦は、とくに当時の上流階級において一定数いたの

ではないかと思うのである。そして、その当時の絵葉書は、そうした、昔の言葉で表現するところの「西洋かぶれ」の夫婦像を、目新しく滑稽なものとして描いたのではなかったか。

もしこの推測があたっているとしたら、清水が「女房天下」絵葉書について、第一次世界大戦後の恐慌によって給料が減った夫が女房に頭が上がらなくなったことで生まれたとしたのは誤りである。そうではなくて、「女房天下」絵葉書の始まりは、明治時代までさかのぼり、文明開化による西洋風俗への憧憬が元になって生まれたとみるべきではなからうか。

4. 絵葉書と明治・大正期の夫婦

「イクメン」は、2010年ごろに「育児に積極的に参加する父親」について、イクメンをもじって言い表した言葉であり、「カジダン」とは、その4年後に「料理、洗濯、掃除などの家事を楽しみ、積極的にこなす男性」をさす言葉として生まれたとされる⁸⁾。では、それ以前の日本社会には、イクメンもカジダンもいなかったかと言えば、決してそうではない。

先に示した飯澤天羊や石野馬城の絵葉書にみられるように、戦前にも、イクメンもカジダンが存在していた。次にあげる、これらの3枚は、③大正7(1918)～昭和8(1933)年のものである⁹⁾。

真ん中の絵葉書の女房はヴァイオリンを弾いている。先にあげた②明治40(1907)～大正7(1918)年に作られた石野馬城の絵葉書にも、ピアノを弾く女房の傍らで子どもに放尿させる夫の図柄があった。このほかにも、その下にあるように、先の3つよりも昔の時期に作られた②明治40(1907)～大正7(1918)年の北澤楽天(左)や作者不詳(右)の絵葉書には、ピアノを弾く女房のそばで子どもの世話をする夫を描いたものがある。

この時代において、家庭におけるピアノとヴァイオリンという楽器は、どういうものだったのだろうか。



〔家事・育児をする夫〕絵葉書)



〔ピアノを演奏する妻〕絵葉書

国立歴史民俗博物館が監修した『新書版 性差の歴史』には、次のような記述がある。

新たな家庭像において、音楽は、家庭の団欒を実現する手段の一つとみなされ、女性や子どもがその担い手と考えられました。ピアノやヴァイオリンなどの洋楽は、家庭音楽として理想化される一方、女性が職業的音楽家になることは達成困難とされました —中略— 日本初の女性向けグラフ誌『婦人画報』の「婦人の仕事」特集号（1909（明治42）年）では、「貴婦人の応接ぶり」「生花と茶の湯」「女の先生」「農家の妻」などととも「ピアノとヴァイオリンの合奏」や「三曲合奏」が紹介されています¹⁰⁾。

もし当時家庭に、このようにピアノやヴァイオリンが新たな女性のたしなみとして普及したのが事実だとするならば、これらの漫画絵葉書は誇張でも空想でもなく、これも当時の家庭生活を如実に表現していたと考えるべきである¹¹⁾。

ただし、ではこうした家庭が当時普遍的に存在していたのかと言えば、おそらく、そうではないのではなかろうか。明治・大正期は、現代社会よりもずっと階級社会であった。ピアノやヴァイオリンを奏でる女房がいる家庭が社会の多数派であったとは、とても考えられない。そのことは次に示す絵葉書からも推察できる。



(庶民的な「女房天下」絵葉書)

宛名面の様式から、上段の2枚は③大正7(1918)～昭和8(1933)年のもの、中・下段の3枚は、①明治33(1900)～明治40(1907)年のものと推察される。これらの絵葉書からイメージされる家庭は、先に示した石野馬城や北澤楽天が描いた家庭の姿とは、明らかに異なっている。

この点を理解するにあたって、益田太郎冠者が書いた「女天下」という芝居が参考になるだろう。

この芝居は、明治43（1910）年に新富座で上演されていたが、大正2（1913）年に東京帝国劇場で上演され、帝劇女優劇を軌道に乗せたと言われるヒット作品である¹²⁾。現在では、その脚本が国立国会図書館のデジタルコレクションとして公開されているので、容易に読むことができる。

あらすじは、次のようなものである。第1場。魚屋八五郎が帰宅すると、帰りが遅いことに腹を立てた妻おせうと口論になる。八五郎は湯屋へ行くと偽って出入り先である銀行員の春木定次郎の家へ向かう。春木は大学でのエリートだから、妻に意見してくれるだろうと考えたのである。第2場は、西洋風の調度品に囲まれて、春木の妻、百世夫人がピアノを弾いているところから始まる。彼女は米国ボストン某女子大学出身で英字新聞を読み、英語を話す才媛である。召使が春木の帰宅を伝えに来る。しかし、百世夫人は夫の帰宅が遅れたことに我慢がならない。涙を流して夫をなじる。帰宅が遅れた理由が取引先から接待を受けたため、そこには芸者もいたことがわかると彼女の怒りは頂点に達する。たまたま、春木は頼まれた用事があるからと、でまかせを言って家を出る。そこで八五郎と遭遇。ふたりして岩山鉄之丞の家へ向かう。岩山は旧幕臣の隠居老人である。ここからが第3場。岩山は二人の話聞いて呆れかえる。彼のセリフが面白い。「西洋では男女同権とか、女尊男卑とか申して、女の靴まで男が結ぶそうだが、彼等は彼等で勝手にさせておくがよい。日本には日本の風俗習慣がある。又、我国の女の心得としては、嫁しては夫姑につかえ、老いては子に従えともいい、佛法では女三界に家なしとか、外面如菩薩内心如夜叉と言って、その邪心を戒め、識者は女子と小人養い難しとも言ったではござらぬか 一中略一 グズグズ申さば、腕力に訴ったえ、なおそれでもわからずば男子の意気地だ、一刀両断のもとに切り捨てなさい。わかったか!!!」そこに、車夫の声、彼の妻、かね子夫人の帰宅を知らせる。すると、とたんに岩山の態度が一変、震えだして声も小さくなる。かね子夫人は、春木と八五郎から話を聞き、「お前さん、二人にそんな生意気なことを言いましたか」と詰問して「この頃少し手ぬるくすると直ぐつけあがって好い気におなりんなさる。今日はウンとお仕置きをしてあげますから」。岩山は二人に助けを求めるが、強力のかね子は、春木と八五郎の襟首を両手につかみ、鉄之丞を足で踏みつける、というところで幕になる。

「女天下」では、3組の夫婦が描かれているのだが、いずれの夫も女房に頭が上がらない。当時、ピアノやヴァイオリンを弾くのは、春木定次郎・百世のような、西欧的な生活様式を好む家庭だったに違いない。そして、この何よりこの芝居の勘所は、岩山鉄之丞のような伝統指向的な家父長制論者が最後に笑いものにされるクライマックスだと言ってよいだろう。

さて、明治・大正期の漫画絵葉書から、筆者がとくに関心を引いたものをさらに2種類紹介する。一つ目は、夫が出産に立ち会っている絵葉書である。右側の絵葉書は、石野馬城による②明治40(1907)～大正7(1918)年のものであるが、産湯を運んでいる図柄である。左のものは、それより古く、①明治33(1900)～明治40(1907)年のもの。父親自らが子を産湯に入れている。そこには、「ネ……アナタ大変ですネ……」「ナニサ製造者の仕上ハ当然サ」「ネ……アナタニヨクヨク似テイルヨ」と書かれている。今日でも、ここまで徹底した男女共同参画はまずありえないだろう。

われわれは、夫が自ら子の出産に立ち会う、いわゆる「立ち合い出産」は、戦後に生まれたとあり方だと思いがちである。しかし、「公益社団法人 日本看護協会」のホームページにある「助産師の歴史」には、次のような記述がある。



〔分娩を手伝う夫〕絵葉書

70年代には、夫の立会分娩が言われるようになり、本人や家族の思いとかけ離れないような出産のあり方を見直す機運が高まるようになっていきました。(しかし、そもそも、自宅分娩のときには、日本では一般家庭においては夫や家族の立会はふつうのことであったと語る産婆もいます。)¹³⁾

文章中カギカッコ書きの部分に注目したい。この産婆が述べたことは、まぎれもない歴史的事実だったのではなかろうか。

二つ目は、子どものいたずらに引っかけた父親を描いた次の左の絵葉書である。



〔子どもに騙される父親〕絵葉書



〔時事新報漫画絵葉書〕2)

われわれは、明治時代は家父長が絶対的権力を持っていたと思いがちである。事実、右側の北澤楽天の絵葉書は、タバコを吸い新聞を読みながら、二人の女性に足袋をはかせてもらっている男性の姿を描く。これは、まさに明治時代の家父長のイメージである。

ところが左の絵葉書は、父親が騙された姿を見て母親と子どもが笑っている。これは、まるで戦後民主主義の家族を描いた漫画「サザエさん」と同じではないか¹⁴⁾。この絵葉書は、先に紹介した喜劇「女天下」と一脈通じている、とも言えよう。明治時代にこのような（反権威主義的な）漫画絵葉書が流通していたことは注目されてよい。

さて、そろそろ本研究の知見をまとめることにする。

第一に、「女房天下」の風潮は大正9（1920）年以降に生まれたものだというのは誤りである。その起源は明治時代にまでさかのぼることができる。

第二に、双六と絵葉書では、その表現内容が大きく異なる。具体的に述べれば、次の通りである。明治・大正期の修身教科書と双六は、総じて、男尊女卑のジェンダー秩序と家父長制にもとづくイエの世界を描いていた。これに対して、明治・大正期の漫画絵葉書は、それらとは対照的な「女房天下」や平等な男女関係、そして父親をからかう母親と子どもなどを描いていた。ではなぜ、教科書はともかくとして、同じように漫画で構成される「双六」と「絵葉書」で、これほどまでに異なるのであろうか。

筆者は次のように考える。「双六」というメディアは、数人で遊ぶものであるから、パブリックなものであり、基本的に子ども向けのゲームで、それゆえ低い識字能力も可とするという特性を持っていた。一方「絵葉書」というメディアは、パーソナルなやり取りのための、大人向けの通信手段であり、一定程度の読み書き能力が必要であった。こうした両者のメディア特性の違いが双六を体制のメディアにして、絵葉書をそこから比較的自由的なメディアにしたのではないか。

また絵葉書は、公教育の普及による識字率の向上に伴って、男性のみならず女性が購入して使用することもあったであろう。そのとき、女性の気持ちを表現する絵が求められたのではないか。この点で、当時の絵葉書は、親しい間柄でスタンプのやり取りをする現代のLINEのようなものだったと言えることができるかもしれない。

こうしたメディア特性の問題のほかに、第三の問題として、当時実際に存在していた家族や夫婦関係（ジェンダー秩序）をどのように理解すべきなのかという論点もある。

筆者には、今回明らかになった漫画絵葉書に描かれた夫婦の姿は、従来の見解に対して、新鮮な視点を提起しているように思える。これまで、日本社会における戦前の「家族」についての見解は次のようなものであった。

川島武宣は『日本社会の家族的構成』（岩波現代文庫、初出1946年）において、それまでの日本社会における「家族」を論じて、封建武士的＝儒教的家族と庶民家族という2類型を提示しつつも、それらのいずれにも問題があるとして、次のように述べた。

日本の社会は、家族および家族的結合から成り立っており、そこで支配する家族的原理は民主主義の原理とは対立的なものである。家族的原理は、民主主義の原理とはカテゴリーをこと

にするのであり、「長をとり短をすてる」というような生やさしいことで、われわれの家族生活および社会生活の民主化をなしとげ得るものでは決してないのである。まさにこの家族的な生活原理こそ、われわれの社会生活の民主化を今なお強力にはばんでいるものであり、これの「否定」なくしては、われわれは民主化をなしとげ得ない。だから、民主化はわれわれにとって、社会生活の革命を意味するのであり、また革命でなければならないのである¹⁵⁾。

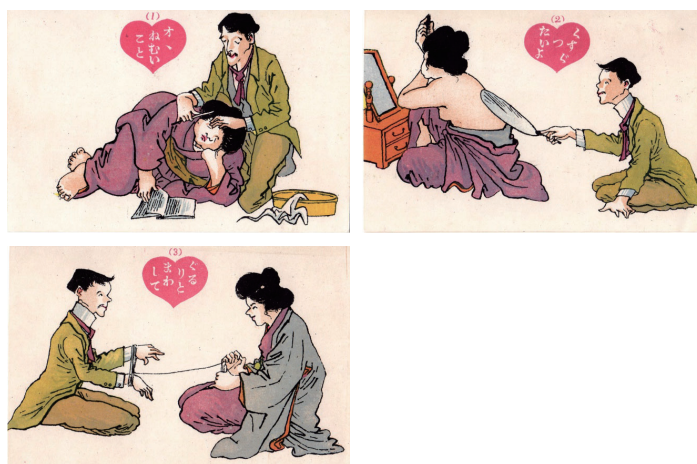
また神島二郎は『日本人の結婚観』（講談社学術文庫、初出「結婚観の変遷」1961年）において、次のように述べている。

近代の日本人の結婚観は、よく考えてみると、ひどく歪んだものにみえます。大家族的な家族生活がいつのまにか崩れて小家族的な家族生活が普通になってきましたが、そこにあるのは家族というよりも同棲ないし同宿とよぶにふさわしいように思われます¹⁶⁾。

さらに『日本の婦人問題』（岩波新書、1978年）を著した村上信彦は、次のように述べた。

日本の婦人問題の核心は、私見によれば封建的な家制度にみられる。しかもそれは過去の歴史のなかばかりでなく、現在の生活にも生きている。また国民のおくれた部分のみでなく、進歩的な政治運動や民主組織のなかにもみることができる。それは家制度を原点とする男女差別の問題としてあらゆる分野に生き残っている¹⁷⁾。

しかし、明治・大正期の日本社会において、実際の家族や夫婦関係（ジェンダー秩序）は、彼らが全否定するような、そんなにひどいものだったのだろうか。最後に紹介するこれら3枚の絵葉書は、いずれも明治時代のものであるが、筆者には、ただの仲睦まじい夫婦の光景にしか見えない。



（「仲睦まじい夫婦」絵葉書）

明治・大正期は、身分制格差が残る社会であった。したがって、少なくとも言えるのは、それを一様なものとして単純化して考えるべきではないことである。都市と農村、階級階層に応じて、多様な家族と夫婦関係が存在していたことは間違いない¹⁸⁾。だから当然なこととして、中には本当にひどい家族、夫婦関係もあったことだろう。しかし、それが社会において全てだったとは決して言えないのではないか。筆者には、明治・大正期の漫画絵葉書は、われわれに学問的反省を促しているように思える。

よく一緒に論じられがちであるが、はたして、主に結婚、離婚、相続等にかかわる「家制度」と日常生活の相互作用である「夫婦関係（ジェンダー秩序）」を同一なものとみなしてよいものか。われわれは、この時代を修身教科書や双六に示される体制側の資料を頼りにして、偏見を持って見てはいなかったのか。

あるいは、戦後の研究者は開戦直前の日本社会にしか目が届かなかったのであって、それより前の明治・大正期には、やがて第二次世界大戦へ向かう時代の流れの中で、たしかに存在していたにもかかわらず、蕾のまま開花することなく枯れていった、新しい家族や夫婦関係（ジェンダー秩序）の可能性があったのではなからうか。

戦後の家族研究者たちは、戦前の家族に、やがて戦争に突き進んでいった日本社会の元凶を発見して、それが今も生き残っていることを批判した。しかし、それを言うのなら、昔の家族にも良い部分があり、それは今も生き残っていることについても、指摘しなければ不公平にならないか。

筆者には、明治・大正期の漫画絵葉書は、こうした幾つかの問題を提起しているように思われるのである。

註

- 1) 早川洋行「戦後期双六にみる日本人のエートス」『われわれの社会を社会学的に分析する』ミネルヴァ書房、2020年。
- 2) 文部省『尋常小学校修身書：巻六児童用』1922年、pp.60-63。一部現代仮名遣いに変更している。同様の記述は明治期の修身書にもみられる。
- 3) 能勢榮『高等小學校修身書：生徒用巻三』金港堂書籍、1892年、pp.28-31。一部現代仮名遣いに変更している。
- 4) 加藤秀俊・前田愛『明治メディア考 対談 加藤秀俊・前田愛』中公文庫、1983年、pp.168-169。
- 5) 清水勲『漫画に描かれた明治・大正・昭和』教育社、1988年、p.90。
- 6) 学習院大学資料館編『絵葉書で読み解く大正時代』彩流社、2012年、p.18。ちなみに、かつて人々は、年賀の挨拶をするのに直接出向いて行っていた。それが「年賀はがき」に変わるのには私製絵葉書ができてからである。岡本綺堂『江戸の思い出』河出文庫、2002年、pp.84-87。
- 7) 関伊右衛門『西洋文化の悲哀』登美屋書店、1922年、pp.65-66。
- 8) 福光恵「カジダン料理・掃除もモテ男の条件」『日経プラスワン』2014年3月15日、p.3。
- 9) 雑巾がけをしている絵葉書は、②明治40（1907）～大正7（1918）年のももあることを確認している。
- 10) 国立歴史民俗博物館監修・「性差の日本史」展示プロジェクト編『新書版 性差の日本史』インターナショナル新書、2021年、pp.174-176。
- 11) 歌川光一は、東京府内就学者層女子の主要な稽古事を調べている。それによると1913年には「琴」、「長唄」、「生

明治・大正期の漫画絵葉書にみる夫婦のかたち

- 花]、「茶の湯」]、「清元」だったが、1928年に「茶の湯」と「清元」に代わって「ピアノ」と「踊」が入り、その後の1931年、1934年の調査においても「ピアノ」は、主要な稽古事であり続けた。歌川光一「戦前期における理想的女子像の『伝統/近代』を捉える視点としての『音楽のたしなみ』』『学習院大学文学部研究年報』(60), pp.191-211, 2013年。また明治末期に、伝統的「家」制度の残存とは言えない、「あたらしい家族」や「夫婦愛」が現れてきたことはすでに指摘されている。牟田和恵「日本型近代家族の成立と陥穽」井上俊他編『〈家族〉の社会学』岩波書店, 1996年。田中亜以子『男たち/女たちの恋愛』勁草書房, 2019年。
- 12) 「女天下」は落語の作品にもなっている。高野正雄『喜劇の神様 益田太郎冠者伝』角川書店, 2002年, pp.60-62.
 - 13) <https://www.nurse.or.jp/nursing/josan/oyakudachi/kanren/sasshi/room/index03.html>
2022年2月確認。
 - 14) 「サザエさん」については、早川洋行「ジェンダーの知識社会学」『われわれの社会を社会学的に分析する』ミネルヴァ書房, 2020年を参照されたい。
 - 15) 川島武宣『日本社会の家族的構成』岩波現代文庫, 2000年, p.23.
 - 16) 神島二郎『日本人の結婚観』講談社学術文庫, 1977年, p.9.
 - 17) 村上信彦『日本の婦人問題』岩波新書, 1978年, p.211.
 - 18) タキエ・スギヤマ・リブラは、明治期の「多くの華族は熱心に西欧化した」として、「住まい, 食べ物, 衣服, 所有物」ばかりではなく、子どもに自分たちをパパやママと呼ばせたり, 英語やフランス語で挨拶させたり, キスマでさせる人々もいたと述べている。タキエ・スギヤマ・リブラ(竹内洋・他訳)『近代日本の上流階級華族のエスノグラフィー』世界思想社, 2000年, pp.119-122.